

2010年7月15日 印刷  
2010年7月22日 発行

# 龍谷漫學

第1卷 第1号

---

村井敏邦教授 退職記念論集  
森山浩江教授 感謝記念論集

---

龍谷大学法学部漫画研究会

## 随筆

## 私のマンガ遍歴

平野 哲郎

「龍谷漫学」が発刊されるというこの機会に、読んでいただく価値があるか分かりませんが、マンガについての個人的な追憶をしたためてみました。

— 私がはじめてマンガを買ってもらったのは小学校3年生のときでした。忘れもしない「ドラえもん」の第6巻と第7巻でした。第1巻から第5巻までは友達の家で読んでいたのですが、友達もそこまでしか持っておらず、どうしても続きが読みたくて母親に頼んで一緒に本屋に行って買ってもらったのを覚えています。第6巻の最終話はドラえもんが未来に帰ってしまうという名作「さようなら、ドラえもん」です。ジャイアンとけんかをして勝ったのび太が、ドラえもん「見たろ、ドラえもん。勝ったんだよ。ぼくひとりで。もう安心して帰れるだろ。ドラえもん」と語りかけ、最後のコマでのび太が「ドラえもん、君が帰ったら部屋ががらんとしちゃったよ。でも……すぐになれると思う。だから……心配するなよ。ドラえもん」と独り言を言うコマは、読むと必ず涙がこぼれたものです。

結局、ドラえもんは第7巻の最初の話で戻ってくることになり、最終的には作者の藤子・F・不二雄の逝去により、ドラえもんに明確な最終回はないままになっています。ご存じの方も多いと思いますが、同人誌に掲載

## 随筆

されたドラえもんファンの漫画家による「ドラえもん最終話」は、原作者もこの作品なら認めてくれるのではないかというくらいストーリーも絵もとてもよくできた話で、これまた涙なくして読めないものです。紙媒体は小学館の抗議により回収されていますが、ネット上では「ドラえもん最終回」と検索すると、今のところ読むことができますので、興味のある方はどうぞご一読ください。キャラクターの著作権については「ポパイ・ネクタイ事件」に関する最高裁判所平成9年7月17日判決がありますが、法律論はつまらなくなるので割愛しましょう。人の心に響く良い作品は、法律がどう言おうと広がっていくものだということを感じます。

私は、ドラえもんからはじまって、藤子作品はかなり読みました。「オバケのQ太郎」も全巻そろえていましたが、その後石森章太郎などが作画を手伝ったため著作権関係が複雑などという謎の理由（真相は不明）で長期にわたって絶版になっていました。昨年刊行が開始された「藤子・F・不二雄大全集」（小学館）にはオバQも収録されているようで嬉しい限りです。「キテレツ大百科」や「21エモン」といった藤子・F・不二雄作品ばかりではなく、「魔太郎がくる!」「ブラック商会変奇郎」「笑うセールスマン」「ヒットラーおじさん」といった藤子不二雄Aの独特の怪奇な世界にも魅了されました。

二 怪奇ものといえば水木しげるでしょう。「ゲゲゲの鬼太郎」だけではなく、数多くの短編を描いていて、その短編集をかなり集めました。小学生5年生くらいから町の古本屋をいくつも回って、「怪奇死人帳」「死者の招き」などの時代物や「敗走記」などの戦記物を小遣いをはたいて買っていました。当時もう定価の2,3倍のプレミアがついていましたが、今ヤフーオークションなどで見ると何万円にもなっているものもあるようです。もっとも汚い字で「平野哲郎」と所有権が明記されているので市場価値はないでしょう。

水木マンガで印象に残っているのは「幸せの甘き香り」という短編で、ネズミ男が、「こうしたら幸せを手に入れることができる」とさまざまな甘言を弄して少年を騙すのですが、やっと奪い取った財布には三文しか入っていません。ネズミ男は「ちえっ、あれだけ熱演してたったこれだけじゃ割にあわねえや。ああ、天地の過ぎゆかぬうちにわしも幸せの甘き香りをかぎたい……」とぼやくのです。今もときどき「幸せとは何だろう」と考えるときそのセリフが思い出されるのです。

ちょうど、水木夫人(武良布枝)原作の「ゲゲゲの女房」がNHKの朝の連続ドラマで放映が開始されました。原作では、赤貧の中でも「この人のマンガは本物だ。絶対にいつか認められる」と信じていたこと、そして水木しげるが40歳を過ぎてから作品が認められ苦勞が報われたこと、しかし売れるようになってから心が離れてしまい、寂しい思いをしたこと、そして今「終わりよければすべてよし」の心境に至ったことが飾らずに書かれていて味わいがあります。

三 同じころ「ジャングル大帝」の再放送が放映されており、そこから手塚治虫作品にもはまりました。「アトム」や「リボンの騎士」のような子ども向きの作品だけではなく、「きりひと賛歌」などの成人向きの作品からも人間の生きる意味のようなものを考えさせられました。ただなんといっても「火の鳥」は別格でした。人間の魂とはどのような存在なのか、ということについて様々な切り口から描かれており、人生観に大きな影響を受けました。「月刊マンガ少年」という朝日ソノラマから出ていた雑誌の別冊版をこれも古本屋でそろえ、何度も読み返しました。ちなみに現在入手しやすい角川書店版では、作品の一部が削除・改変されています。例えば、ロボットが破壊されるシーンや血飛沫を上げて人が殺されるシーンがなくなっているのです。残酷性の緩和が理由なのでしょうが、作品の印象がかなり変わってしまっています。

## 随筆

井伏鱒二が晩年「山椒魚」の最後の部分を大幅に書き直してブーイングを浴びたことを想起します。

中学校に入るころにはマンガの蔵書は数百冊に及んでいました。在学していた中学校では定期テストの後、生徒本人・親・担任教師がテスト結果について反省・意見・感想をそれぞれ書くノートがあったのですが、最近それが出てきので読み直すと、私の親は「テスト前も寝っ転がって数十冊のマンガを読んでおりいつ勉強していたのか分かりません」と呆れていました。このころはマンガ家になりたいと思っていました。

四 高校生になると、白土三平の「カムイ伝」や「忍者武芸帳」を読み、マルクスの階級闘争的歴史観への傾倒を深めました。あまり有名ではありませんが、白土三平の「大摩のガロ」という作品は、ガロという忍者と子どもたちの交流を描いた作品で、白土作品の例に漏れず、悲劇的なラストを迎えるのですが、雑誌「ガロ」の誌名の由来になったという名作です。

さらに、私が大学に入った年に「家裁の人」(毛利甚八原作・魚戸おさむ絵)の第1巻が発売され、裁判官への憧れを誘われました。また、「大正野郎」(山田芳裕)という芥川龍之介かぶれで浅草に下宿している学生が主役のマンガは、「平徹」という私と名前が似ている主人公のレトロ趣味が好きでした。

「家裁の人」は主人公が立派すぎて現実とのギャップがありますが、麻生みことさんの弁護士マンガ「そこをなんとか」は主人公が等身大で好感が持て、法曹ネタのギャグも的確でとても楽しく読んでいます。以前、麻生さんが龍谷大学にいらしたときは残念ながらお会いできなかったのですが、子どもたちと「本能のれんスタンプラリー」という極めてローカルなイベントに参加したときに、麻生さんが土山先生とご一緒に参加していらっしゃるところに偶然出くわし、ご挨拶することができました。子どものころに憧れていた本物のマンガ家さんとお会いすることができ、感激でした。是非、龍谷大学漫画研究会でお招きしたいですね！

以上、落ちも何もない駄文で恐縮ですが、村井先生、森山先生に捧げさせていただきます。